

ネパールヒマラヤ・ランタン谷の観光地化(15年間での)ご紹介と

2015年大地震での被災地(ランタン村)の現況 長岡 正利

ランタン谷は、1949年に英国人・ティルマンが訪れて「世界で最も美しい谷」と称賛したことで知られています。

「ランタンヒマール」と言われるこの地は、首都カトマンズから近い北方に位置し、ランタン国立公園の一部となっています。

谷沿いには、5000～6000m峰が連なり、最高峰はランタン・リルン(標高7245m：1961(S36)年に大阪市立大学山岳会の3人が遭難死、1978年に同会が執念の初登頂を。)

演者は、2007年8月(モンスーンの最中)と、今年の春4月に、南東側から見た、ランタン・リルン頂上この地を訪問しました。その16年を隔てての、驚くべき大変貌(ロッジなどの大增築)と、2015年ネパール大地震での山頂下のランタン村の被災状況及び復興の現況を、200枚程の写真で紹介します。



16年前は深い針葉樹林中に1軒の「ラマホテル」のみだったが、今や、登山道の両側に数軒のロッジが林立して、大賑わい。

注：その名称は、谷奥のキャンジュン・ゴンパ(チベット仏教のお寺)に行くチベット仏教僧がここを宿営地とした故の地名で、「ホテル」ではない。

2007年時点のランタン村と、現在の被災地を、同じ視点から。上写真(モンスーン期の雨天下)をよく見ますと、急斜面に3筋の細流があり、現在(右上写真)では、植生が剥ぎ取られて岩壁となりながらも、その3筋の細流位置は、岩壁を刻む溝として見えています。

上述の地震では、山頂直下の懸垂氷河の崩壊掃流・爆風で、ランタン村全域が潰滅したもので、巨大な岩壁の下にあった3階建てロッジが1軒だけ残りました。崩壊の直撃のほか、爆風による家屋倒壊、対岸斜面の樹林地にまで被害が及びました。なお、1970年のドイツの航測地形図からは、死者が多かった被災地域(平坦で住みやすい)には、その頃までは家がなかったことが明瞭です。

(日本でも、その様な事例(過去の伝承から「住むべき地ではない」地が住家連坦となって大災害)は随所で。)



ランタン谷奥に見えてくる美しいヒマラヤ巒のガンチェンポ 6387m



谷の南側の山々



飛雪のランタンリルンと満開の石楠花。様々な花色。神猿、ハヌマンランゲーンも。



日本の春にも見られそうな、山野の花も。順に、エニシダ・ヘビイチゴ・サクラソウ・アヤメ・ネコヤナギの、各仲間(種名不詳)